特集

Officeファミリーの“Office Groove 2007”とはなにか

“分散型”へと進む新たなOfficeの幕開けを告げるのか

吉川 満広
YOSHIKAWA, Mitsuhiro

the 2007 Microsoft Office Systemsのラインナップのひとつとして新たに“Groove”が加わった。Grooveとはいったい何なのか。その成り立ちまでの歴史的背景を含めて概要と、どのような場面で使用されてきたかを紹介する。

はじめに

2006年末までに出荷予定のOfficeスイートの新しいバージョンである「the 2007 Microsoft Office Systems」には、これまでの製品とは少し異色の製品としてGrooveが追加された。この製品ラインナップにおけるGrooveの位置づけは表1のようになっている。

この表を見ればわかるとおり、パッケージ製品では「Office Ultimate 2007」、ボリュームライセンスでは「Office Enterprise 2007」において、Grooveは提供されるわけだ。なお、Groove単体での購入もできる予定となっている。

GrooveのOffice 2007での位置づけは、「インフォメーションワークの新たな世界」とうたっていることからわかるとおり“コラボレーションツール”であり、すなわち、従来のデスクトップ製品の寄せ集めであるOffice製品群に、それらデスクトップ製品を利用した共同作業を効率よく行なえる環境を与えることになる。

しかしそれは一体全体どのようなものなのだろうか。

まずはGrooveの歴史をひもときつつ、その指向性を探ってみることにしよう。

Grooveの歴史的経緯

レイ・オジーという人物

2005年3月にマイクロソフトは、レイ・オジー氏が設立したソフトウェアベンダー「Groove Networks」を買収し、そのCEOであるレイ・オジー氏はCTOとしてマイクロソフトに参画すると発表した。

もともと、「Groove Networks」は製品の初期の段階からマイクロソフトの.NET Frameworkを全面的に採用したり、2001年10月にはマイクロソフトから当時約60億円の出資を受けるなど、マイクロソフトとの友好な関係は周知の事実であった。しかしそれ以上に、レイ・オジー氏はあの「ロータスノーツ」の開発者であり「グループウェア」を発明したと言っても差し支えがないほどに、ソフトウェア業界に影響を与えた人物なのである。

始まりはロータス社から

レイ・オジー氏はPCの普及と共に、PCがマシンごとにそれぞれ「コミュニケーション」のインフラとして使用されることによる無限の可能性に魅せられて、氏自身の理想を現実化するために「アイリスアソシエイツ」を設立した。

当時、アイリスアソシエイツはロータス社の創業者ミッチー・ケーパー氏の支援を得て新しいソフトを開発することになっていたため、オジー氏は「ノーツ」のコンセプトを提案したものの、ロータス社は主力製品「1-2-3」の発展型統合ソフト「シンフォニー」を企画していた。

そこでケーパー氏は、アイリスアソシエイツが「シンフォニー」の完成後であれば、「ノーツ」の開発をしても良いという約束をし、アイリスアソシエイツは、その約束どおり「シンフォニー」を完成させ、いよいよ「ノーツ」の開発に取り組むことになる。

オジー氏が率いるアイリスアソシエイツは1986年に「ノーツR1」を出荷。遅れて日本でも、1993年に米国で発表された「ノーツR3」から出荷されるようになる。

表1：the 2007 Microsoft Office System スイートの製品ラインナップとコンポーネント

	パッケージ製品での提供				ボリュームライセンス製品での提供		
	Office Personal 2007	Office Standard 2007	Office Professional 2007	Office Ultimate 2007	Office Standard 2007	Office Professional Plus 2007	Office Enterprise 2007
Word 2007	●	●	●	●	●	●	●
Excel 2007	●	●	●	●	●	●	●
Outlook 2007	●	●	●	●	●	●	●
PowerPoint 2007		●	●	●	●	●	●
Publisher 2007			●	●		●	●
Access 2007			●	●		●	●
InfoPath 2007				●		●	●
Communicator						●	●
OneNote 2007				●			●
Groove 2007				●			●
InterConnect 2007				●			
IME 2007	●	●	●	●	●	●	●
エンタープライズコンテンツ管理(*)				●		●	●
電子フォームサービス (*)				●		●	●
情報保護機能 (*)				●		●	●

*）コンポーネントではなく拡張された機能。

しかし、「ノーツR4」が日本で大成功を収めるのと時を同じくして、IBMがロータスを買収。その後まもなくオジー氏はロータスを退社し、1997年10月に「Groove Networks」社を設立する。

設立当初は「PtoPの会社を設立した」というアナウンスしか聞こえてこず（当時はPtoPと言えば“ナップスター”で悪名が広がっていた）、製品コンセプトなども2000年7月に最初のバージョン「Groove Preview Edition」が発表されるまでは、その動向はベールに包まれていた。

その後、2002年に「Groove 2.0」、2004年に「Groove 3.0」と着実にバージョンを上げ、名称も「Groove Vertical Office」（＝Groove 3.1）と変更される。

そして、今回の「the 2007 Microsoft Office Systems」と合流し、「Microsoft Office Groove 2007（Groove 4.1）」になるわけである。

ノーツでの運用の限界

では、なぜノーツと袂を別つことになったのだろう。

たしかにノーツはクライアントソフトとして非常に優れた機能を持っている。が、そのクライアント／サーバー型設計が仇となった。

ご存知のとおり、クライアント／サーバー型のアプリケーションでは、サーバーで収集／集積した情報を各クライアントへリプリケーションすることを基本としている。そのため、ユーザー数が多くなると、当然サーバー数も多くなり、今度はサーバー間のリプリケーションのためのスケジュール設定などが複雑にならざるを得ない。管理工数の増大が問題になるのだ。

さらに、組織をまたいだ運用に関しては、サーバー間で信頼関係を結ぶための作業が必要になる。結果、管理者への負担がますますかさむ。

ノーツが多用されることで、これらの限界が見えてきたのである。

暗号化技術の影に

オジー氏の実績として面白いのは、公開鍵暗号の製品で有名なRSA社を実質的に救い、その暗号技術の普及に大きな力を発揮したところである。「ノーツ」は当初から重要な情報のやりとりを想定して設計されていたが当時は共通鍵の暗号しかなく、安全に個々に情報を交換できなかった。しかし、公開鍵暗号ではその弱点を克服しオジー氏の理想とする安全な情報の交換ができるようになった。RSA社はまだ公開鍵暗号を製品として売ることができず存続の危機にあったところを、オジー氏の「ノーツ」への採用で救われたということである。